

## 「神の慈愛、寛容、忍耐を軽んじるな」

牧師 岩本 聖史

聖句「あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。」

(ローマの信徒への手紙二章四節)

冒頭の聖句で、使徒パウロは、旧約聖書の「神様の豊かな慈愛、寛容、忍耐」という三つの富を例に出します。主なる神様が憐れみに満ち、寛容と忍耐に満ちて、裁きを遅らせなさるのには、二つの大きな理由があります。

一つは、憐れみ深い神様は、私たちを「悔い改めに導くために、裁きを与えずに待つてくださる」ということです。第二は、主なる神様が「慈愛と、忍耐と、寛容に満ちた御方だから」です。

しかし、もし、主なる神様の憐れみを軽んじるなら、大変なことになります。神様の慈愛、忍耐、寛容を軽んじることは、神様の怒りを蓄えて行くことになると、警告されています。

主なる神様が、「私たちだけを特別待遇にしていてくださるのだ」などと、誤って信じ込み石の心になってしまい、悔い改めの心を失ってしまうならば、神様の方には、聖なる怒りが積もっていくだけ、になります。そして、「神様が正しい裁きを行なわれる聖なる怒りの日」に、積もり積もった裁きが行なわれることになります。

主なる神様は、慈しみの御方であり、力に満ちあふれた御方ですが、その神様は、同時に、

各自の業に従って、よい場合も悪い場合も、「報われる御方である」ことを、決して忘れてはなりません。

二章十一節で神様は「分け隔てなさいません」と記されていますが、原文の意味は、「神様は顔をごらんになりません」です。私たち、人間の間では、「特別な顔を重んじ、顔を恐れること」が起こります。「顔を立てる、顔に泥をぬる、面子が立たない」など。そのように、人とは、もともと、相手の顔を見て、えこひいきしたり、逆に、攻撃したりし易いのです。ところが、主なる神様は、決して、人を分け隔てをなさらない御方です。

主イエス様が語られた「よいサマリア人の譬」を通して、この真理を考えたいと思います。質問者であった「律法の専門家」に対して、主イエス様がなさった譬の大筋は、こうです。ユダヤ人の旅人が、エリコ街道で「追いはぎ」に出合い、持ち物をすべて奪われ、その上、大きな傷を負わせられました。ちょうど、そこをユダヤ人の祭司が、次に、神殿に仕えるレビ人が通りかかったのですが、彼らは半殺しの旅人を助けることなく、「向こう側」を通って行ってしまいました。

三番目に、やって来たのが一人のサマリア人。「ユダヤ人のすべてが、『異邦人の血が混じっている部族』と差別し、軽蔑し、忌み嫌っていたサマリア人」でした。しかし、ユダヤ人ではなく、その差別に苦しんで来たサマリア人が、重傷を負わされたユダヤ人の「よい隣人となって」、彼を助け、傷の手当をした上で、宿屋に

連れて行き、すべての費用を払って彼の治療を頼んだという譬です。

ユダヤ人は神様に選ばれた特別な民。聖なる律法を知り、それを守る民であり、神様の慈愛と寛容と忍耐のもとにある民だ。だから、善である。それに対して、汚れたサマリア人は、神様に呪われた悪の民だ。この断定は、どんなことがあっても、ひっくりかえることはありません。私たちも、お互いに、よく注意をしないといと、このような大間違いに陥ってしまいます。

しかし、ここで、主イエス様は質問者である「律法の専門家」に質問されました。「さて、あなたは、この三人の中で、誰が、追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」(三六節)。隣人愛の原理に関する質問ではありません。「現実には、襲われたユダヤ人の真の隣人になったのは、一体、誰なのか」。専門家からの答えは、「その人を助けた人です。」主イエス様の答えは、「行って、あなたも同じようにしなさい。」でした。ほんとうに心を打たれる譬えであり、主イエス様の御言葉です。

主イエス様が、「よいサマリア人の譬え」を通して、命じられた歩みこそ、使徒パウロが、ローマの教会に訴えた「分け隔てされない神様の救いの福音」であり、ユダヤ人と異邦人の別なく、今日も、世の救い主、御子イエス・キリスト様を通して、私たちを罪と滅びから救い出してくださる「神様の福音」を明らかに示していると信じます。私たちも分け隔てなく、「行って、あなたも同じようにしなさい」という主の御命令に従いたいと願います。